

ボーダレス医学の 新時代

社会のあらゆるところで様々なボーダレス化が進んでいる。とくに象徴的なのはドイツ統合、ベルリンの壁の崩壊であろう。

一般に隔壁を取り払う意味の「ボーダレス」は、上下や個々の存在の隔たりを解消し、融合、平等、調和を重んじる言葉として用いられる。

最近、医学の世界でもこの種の体制変化の機運が出始めた。それは一つには教育授業のあり方と、二つには基礎医学における専門領域の再編であり、三つには医師と患者の関係である。

アメリカのハーバード大学では、教育授業の体制を5、6年前から自己学習方式に切り替えて、普通の授業をやめてしまった。講壇、教壇から先生が消えたのだ。勇敢に自己学習教育に変え、逆に先生はマンネリ化した一方的な教育スタイルを排除したことで、学生との接触の機会も増え、個人教授主義に沿った教育体制をとれるようになった。これは先生と学生の一種のボーダレス化である。

また同じハーバード大学医学部では解剖学の教室がなくなった。ここでは生理学と一緒にやって分子生物学を中心にやっている。また生理学と薬理学が一緒になっている。これは基礎医学における専門領域の再編であり、ある意味では生命研究のボーダレス化であるといえる。

さらにアメリカにおける病院の臨床現場に目を転じてみれば、日本のようにすべて医師を中心に指導・運営されるのではなく、治療のプロセスはチーム医療としてとらえ、すべての医療従事者は患者と等距離におかれている。また無給のボランティアが多くの医療福祉施設で働いており、資格の有無を問わずそれぞれの立場で医療の一役を担っている。

医師と患者の関係も、治療方針の十分な説明

と同意による診療行為の重要性が定着し、インフォームド・コンセントの意義は日本の医療法改正に盛り込まれた経緯もある。患者自身が医師の説明に納得し、同等の理解をもって病氣回復への共同事業を行うことは、いわば医師と患者の意思疎通のボーダレス化である。

振り返ってみれば日本の医学はインド、中国から伝わる伝承医学の最初の波と、第2の波であるドイツやアメリカの西洋医学の影響を大きく受けた。

しからばこれからの日本の近代医学が遭遇する新しい波は、やはりハイテクやバイオ、シルバーといった第3の波に揉まれながら、あたかも細胞融合や遺伝子組み換え技術のように、数種の異種間の細胞を取り込み、融合して一つの新しい生命体を発芽させるように、いわば医学の新種の領域を生み出す可能性を秘めている。

さらに今後の新しい医学の興味は生命のボーダレス化である。デカルト以来、生命は概して体と精神の二元論から究明されてきた。西洋医学の特徴は肉体的生命を重点に探究し続けてきたといえるが、これからは精神・心の領域を含め人間の未知への接近が行われる。

たとえば体と心、脳の作用は従来のスタティックな図譜解剖学から3次元コンピュータ・グラフィックスによるダイナミック解剖学として発展する。死に向かう生理はターミナル生理学として、また楽器が奏でる爽やかな音楽の効果や香り、味覚などの生体作用は情緒生理学として、さらにパラニューロンや、新しいカオスやフラクタル理論を用いたマイクロマシン医学など、まさにこれからの未来の医学は新しい工学理論とのボーダレス化をはかるニューソフト医学が台頭する時代に入っていくのである。



東京大学医学部
医用電子研究施設教務員
山野井 昇